

# The Procedures for *Maṇḍala* Offerings in Buddhajñānapāda ś *Samantabhadra nāma sādhana*

by Kimiaki TANAKA

The *maṇḍala* theory of the later phase of Tantric Buddhism was established in the *Guhyasamāja-tantra*, and there are two schools of interpretation regarding this tantra, namely, the *rya* school and the *Jñ nap da* school. The original Sanskrit texts of almost all the basic works of the *rya* school have been discovered, and critical editions of the majority of these have also been published. In contrast, no Sanskrit manuscript of the *Samantabhadra nāme sādhana*, the basic text on the *utpatti-krama* of the *Jñ nap da* school, had previously been known to exist. However, I discovered that the *Kasyacid bauddhatantrasya ṭīkā* (pra. 1697, kha 2) held by the National Archives in Kathmandu is a commentary by an unknown author on the *Samantabhadra nāma sādhana*, and I have been publishing the romanized text and a Japanese translation of this manuscript in several journals. In this article I present the romanized text of the latter part of the section on the *maṇḍalarājāgrī-nāma-samādhi*, starting from verse 95. Unfortunately, the manuscript ends at verse 105, corresponding to *Guhyasamāja-tantra* XVII. 4, and the remaining folios have not been found. In content, this section describes offerings and gives songs of praise for the *maṇḍala* deities that have been generated in the foregoing sections. For further details, reference should be made to the text on pp. 164-169 and to the tabel on p. 175.

# Buddhajñānapāda の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

田 中 公 明

## ( 1 ) はじめに

インド後期密教を代表する密教聖典『秘密集会タントラ』には、「聖者流」と「ジュニャーナパーダ流」という二つの解釈学派がある。このうち聖者流の根本典籍のほとんどは、すでにサンスクリット（以下Skt.と略）原典が発見され、その大半は校訂テキストも刊行されている<sup>(1)</sup>。

これに対してジュニャーナパーダ流は、『秘密集会』の解釈学派として、聖者流と並び称される有力な学派である。同流の創始者ブツダジュニャーナパーダはパーラ朝初期の密教者で、ヴィクラマシーラ大寺院の金剛阿闍梨に任命されたと伝えられる。彼は文殊から『秘密集会』の奥義を伝授され、『大口伝書』『小口伝書』『普賢成就法』などの十四部書を著したといわれる。

これら十四部書の大半は『チベット大蔵経』に収録され、チベット訳を参照することができるが、Skt.原典は失われている。ジュニャーナパーダ流の生起次第の根本典籍『普賢成就法』*Samantabhadra nāma Sādhana*（以下*Samantabhadra*と略）<sup>(2)</sup>のSkt.写本も、従来は知られていなかった<sup>(3)</sup>。

筆者は、ニューヨークの世界宗教高等研究所IASWRが撮影したネパールの個人蔵写本*Mañjuvajramukhyākhyāna*<sup>(4)</sup>が、『秘密集会』ジュニャーナパーダ流の文殊金剛十九尊曼荼羅の儀軌で、そこにp padeśan（懺悔）として、*Samantabhadra*の第10偈から第17偈までが引用されていることを発見した<sup>(5)</sup>。

さらに契丹の慈賢訳『妙吉祥平等祕密最上觀門大教王經』に説かれる「默念大伽陀」<sup>(6)</sup>が、その第10偈から第18偈に相当することを確認し、その他の資料も参照しつつ、*Samantabhadra*の第10偈から第18偈までの復元を試みた<sup>(7)</sup>。これによって*Samantabhadra*（『秘密集会タントラ』からの引用を除く）の韻律が、密教儀軌としては異例の ry と g tiの混成であることがわかった。

このように筆者は、長らく*Samantabhadra*のSkt.原典を探し求めていたが、ネパール留学中にNational Archivesに所蔵されるpra.1697 (kha 2)のマイクロフィルム<sup>(8)</sup>を入手し、帰国後にその内容を検討したところ、*Samantabhadra*に対する著者不明の註釈の断片であることを発見した。この写本は従来 *Kasyacid bauddhatantrasya tīkā*<sup>(9)</sup>と称され、内容が明かでなかったものである。

*Samantabhadra*の註は『チベット大蔵經』中に4篇が知られているが、本写本は、これらの何れとも完全には一致しない。しかしdPal kun tu bzan' po (\*Śr samantabhadra)造とされる*Sāramañjarī*（以下SMと略）<sup>(10)</sup>とは近接した関係にあり、写本が残存する部分に、同文と思われる複数の箇所が存在する。

わずか貝葉8葉の断片ながら、全体で165偈<sup>(11)</sup>ある*Samantabhadra*のうち、全体の3分の1弱に相当する第55偈から第105偈までの註が残存している。全文を逐語的に註しているわけではないが、釈文から本文の原語の大半を知ることができるのは貴重である。

いっぽう内容的には、ジュニャーナパーダ流の生起次第の根幹をなす「四支」*caturaniga*<sup>(12)</sup>と、文殊金剛十九尊曼荼羅の觀想を説くことが注目に値する。

後期密教の生起次第は、第一初加行三摩地、第二最勝曼荼羅王三摩地、第三最勝羯磨王三摩地の三種三摩地よりなる。このうち写本が残存しているのは、初加行三摩地に属する下品の四支の第二支から、最勝曼荼羅王三摩地の末尾近くまでである。（表参照）

そこで筆者は、『秘密集会』ジュニャーナパーダ流の生起次第*caturaniga*の

Buddhajñ nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

新資料」<sup>(13)</sup>において、この写本の存在を報告し、初加行三摩地の部分のローマ字化テキストと和訳を公表し、さらに拙稿「新出のSkt.写本『普賢成就法註』所説の文殊金剛十九尊曼荼羅について」<sup>(14)</sup>に最勝曼荼羅王三摩地の上品の四支の終わりまでのテキストと和訳を公表したが、写本末尾の部分については、いままで発表の機会を得なかった。

そこで本稿では、この部分のローマ字化テキストと和訳を公表したい。なお今回取り上げる最勝曼荼羅王三摩地の後半部分は、*Samantabhadra*の本文では第95偈から105偈までに相当する。また上述の四支の体系では、前半が上品の四支に相当するの対し、生起した曼荼羅の諸尊への供養と讃に相当する。

- 1 いまだテキストが刊行されていなかった聖者流の重要テキストは、N gabodhi/ N gabuddhiの*Vimśatividhi*と*Samājasādhanavyavasthāna*であったが、これらもSkt.写本が発見され、前者は筆者が『東洋文化研究所紀要』をはじめとする複数の学術誌にローマ字化テキストを掲載し、後者のテキスト（一部）も『東洋文化研究所紀要』148冊に掲載された。
- 2 北京No.2718
- 3 なおR hula S ṃkṛity yanaが、チベットのシャル寺で*Sāramañjarī*（下掲註10参照）のSkt.写本を発見したと報告しているが、同写本は文化大革命中に行方不明となり、いまだ発見されていない。R hula S ṃkṛity yana:Second Search of Sanskrit Palm-leaf Mss. in Tibet (*Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, Vol. XXIII, 1937, Part 1) Mss.No.297, *Caturaṅgasādhanatīkā* (*Sāramañjarī*)
- 4 IASWR:*Buddhist Sanskrit Manuscripts*, A Title List of the Microfilm Collection of The Institute for Advanced Studies of World Religions (1975, New York) p.2, MBB-I-11.
- 5 拙稿「『秘密集会』ジュニャーナパーダ流の新出文献*Mañjuvajramukhy khy na* について」(高崎直道博士還暦記念論集『インド学仏教学論集』[春秋社, 1987年]所収)を参照。

- 6 大正No. 1192, Vol. 20, 905c-906c ; 914b-c。なお前者では、漢字音写と漢訳がともになされている。
- 7 拙著『インド・チベット曼荼羅の研究』(法藏館,1996年)の第10章「『普賢成就法』と『秘密集会』ジュニャーナパーダ流曼荼羅」を参照。
- 8 NGMPP, Reel No. A994/8。なおNGMPPでは、Bauddhatantraという仮題が付されている。
- 9 *Bṛhatsūcīpatram*, 7. Bauddhaviṣayaka, Vol. 1, p. 97
- 10 北京No. 2732, SMにパラレルな釈文が存在する部分は、以下のromanizeと訳で適宜参照した。
- 11 *Samantabhadra*の偈番号は、1986年6月の印仏学会学術大会での金本拓二氏の発表の際、配布された資料によっている。
- 12 1. 親近 sev , 2. 近成就 upas dhana , 3. 成就 s dhana , 4. 大成就 mah s dhana の四支からなり、ジュニャーナパーダ流では、これに上品・中品・下品の三種を立てる。詳しくは、田中下掲13論文を参照。
- 13 前田専学博士還暦記念論文集『我の思想』(春秋社,1991年)所収。
- 14 『密教図像』第16号(1997年)所収。

## (2) 内容の概観

それでは、今回取り上げる部分を概観してみよう。まず写本上の位置は、第27葉の裏面4行目(27b4)から、第28葉の末尾までに相当する。なお本写本では、最終フォリオ裏面(28b)の保存状態が悪く、文字が一部しか判読できない。

いっぽうその内容は、第95～100偈と供養加持真言p j dhiṣṭh namantra<sup>(1)</sup>、第101～105偈までに分かれる。

このうち第95偈の釈に、「《蓮華の中》(=第95偈の初句)で始まり、供養(の真言)で終わる6首のアールヤーによって・・・(諸尊の)輪を供養すべき方軌が説かれた。」とあるように、第95～100偈は、最勝曼荼羅王三摩地の前半部で出生した文殊金剛十九尊曼荼羅の諸尊を供養する方軌を説いている。

これは実際の供養物を使用するのではなく、観想によって供養物を奉獻する

Buddhajñi nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

運心供養の一種といえる。しかしそこには、後期密教を特徴づける性的な観想が導入されている。その方軌は、自らの身体に導き入れられた諸尊が、菩提心(精液)となって妃の蓮華(女性器)に放出され、そこから六つの感覚対象を象徴する六金剛女が生まれ、諸仏を供養すると観想するのである。なおこの観想には、最勝曼荼羅王三摩地の冒頭、上品の四支の第一支において文殊金剛十九尊の出生に用いられた観想法が応用されている。

なお筆者は他稿において、『秘密集会』の金剛女と呼ばれる女性尊が、金剛界曼荼羅の八供養菩薩から発展したことを論じた<sup>(2)</sup>が、ここでは六金剛女が、まさに供養菩薩としての役割を果たしているのを見ることができる。

いっぽう第101偈以降は、「讚の奉獻」stotropah raと規定されるように、『秘密集会』曼荼羅の根幹をなす五仏の讚を説く。まず一切の声境(聴覚の対象)を、木霊のように(実体がないと)考え、自らの心に本尊、すなわち曼荼羅の主尊を観想し、諸法を讚頌の音となす。(第101偈)

なお、ここで引用される五仏の讚(第102～106偈)は、『秘密集会タントラ』第十七分の第1～5偈に相当するが、松長校訂テキストと比較すると、一部の語句に出入が見られる<sup>(3)</sup>。そしてSkt.註は、第105偈の阿弥陀如来讚(『秘密集会』第十七分第4偈)の冒頭で終わっている。

そこで本稿(3)では、この部分の*Samantabhadra*の本偈とSkt.註を対照させ、(4)には本偈とSkt.註の和訳を掲載することにした。なお*Samantabhadra*本文のSkt.写本は発見されていないので、第101偈まではチベット訳を掲げたが、第102偈以下は『秘密集会タントラ』から回収したSkt.を掲載した。チベット訳の本偈は、中国蔵学研究中心編『丹珠爾』所収のリンチェンサンポ訳<sup>(4)</sup>を底本とし、ナルタン(N.)、デルゲ(D.)、北京(P.)、チョネ(C.)の各版から、Skt.註から回収された原文に一致する訳を採用した。

またSkt.註において、本偈からの引用と思われる箇所は太字とし、対応するチベット訳を( )に入れて示した。いっぽう和訳では、本偈からの引用語句

を《 》で括って明示した。

本写本はネパール系写本の常としてbaとvaの区別が無く，saとśaもしばしば混同されている。適宜訂正したので，詳細は本稿（3）の末尾に付した註を見られたい。[...]は汚損・剥落による判読不能を表し，  
は脱字と思われる箇所を修補した部分，これに対して{ }は，写本に存在する文字や記号が不要であることを示し，{...}とした箇所は，文字や記号が抹消記号により筆誅されていることを示す。また写本では，sattvaが常套的にsatvaとなり，レーパ直後の子音が重複するなど，現在とは異なった正書法が見られるが，本稿ではそのまま転写している。

- 1 松長有慶『秘密集会タントラ 校訂梵本』（東方出版，1978年）p. 17。
- 2 拙稿「『秘密集会』曼荼羅の歴史的展開」（『密教図像』第九号，1991年）所収，後に拙著『インド・チベット曼荼羅の研究』（法藏館，1996年）に再録。
- 3 なお本稿（3）では，Skt.註と一致する異読を採用している。
- 4 中国蔵学中心編『丹珠爾』（対勘本）第21巻，中国蔵学出版社 1998（pp. 905 - 926）。

### （3）Skt.テキスト

pad nañ rañgi sa bon 'di rnamś kyis/  
gzugs la sogs pa thams cad drañś nas ni/  
yañ dag byañ chub yid kyi ño bo yi<sup>(1)</sup>/  
'od kyi dkyil 'khor dag tu bsgom par bya//95//

//tad evam hit bhīṣekaṃ cakra ṃ yena vidhin p jayitavyaṃ/ tam  
vidhi ṃ

ka[ 27b5 ]malodara (pad nañ) ity din ry ṣaṭkena p j paryanten ha/  
jñ nasatvahr̥db jabh bhīḥ/ sarvarūpādyām ākr̥ṣya (gzugs la sogs

Buddhajñ nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

pa thams cad drañs nas ni ) svaśar re praveśya<sup>(2)</sup>vajram rganirgata  
ṃ kṛtv **mayūkhamaṇḍala** ( ód kyi dkyil khor ) **bodhicī**[ 27b6 ]  
**ttasvarūpam**( byañ chub yid kyi ño bo yi ) vidy **kamalodare**<sup>(3)</sup>( pad nañ )  
**dhyāyāt** ( bsgom par bya ) /

śes rab ba spu re re las byuñ ba i<sup>(4)</sup>/  
ód zer rnam pa sna tshogs rgya chen tshogs/  
ma lus nam mkha i gtos ni kun tu khyab/  
de la blo dañ ldan pas rab tu spro//96//

ata iti tad evaṃ dhy tv **prajñāpratī** r p }romodbhavam( śes rab ba  
spu re re las byuñ ba i ) **nānāvidharaśmi**<sup>(5)</sup>**vistaravyūham**( ód zer rnam  
pa sna tshogs rgya chen tshogs ) **vyāptasarvākāśatalam**<sup>(6)</sup>( nam mkha i  
gtos ni kun tu khyab } / }matimān( blo dañ ldan pas )ity u[ 28a1 ]tsarg di<sup>(7)</sup>  
bhedabuddhirahitaḥ sann **abhitaḥ**( ma lus ) sarvatobh vena **protsrjet**  
( rab tu spro )

ód kyi sgo las ñes par byuñ ba yi/  
yan lag dri med rgyan kun gyis legs brgyan/  
me loñ pi vañ dri dañ ro yi snod  
gos dañ chos' byuñ ba la sogs pa i//97//

tato **raśmi**<sup>(8)</sup>**mukhanirgatābhir** ( ód kyi sgo las ñes par byuñ ba yi )  
**amalarvābharāṇasvalaṅkṛtā** } bhi }igī ( yan lag dri med rgyan kun  
gyis legs brgyan )i<sup>(9)</sup> r p didevat bhiḥ

mtshan mas rim gyis rnam par sgeg bcas śiñ/  
rol pa i lag pa dam pa rnam dañ ni/  
ód kyī snañ bas sprul pa sna tshogs pa i/  
mchod pa i sprin gyi dra bas khyab pa dañ//98//

**kramene** ( rim gyis ) ti yath kramam [ 28a2 ] ṣaḍbhir darppaṇ-  
dicihnais ( mtshan mas ) tad dyaiś<sup>(10)</sup> ca yathāyoga ṃ khadgapadmā-  
dibhir **vilasantī** ( rnam par sgeg bcas śiñ ) śobhamānā<sup>(11)</sup> **salīlakara**<sup>(12)</sup>  
**pallavānām** ( rol pa i lag pa dam pa rnam dañ ni ) **ābhāvabhāsā**<sup>(13)</sup> ( ód  
kyī snañ bas ) y s ñ ca bh svaṅgahastibhir **nirmitā** ( sprul pa ) **nānāpūjāṃ-**  
**bhujāla** [ 28a3 ] **visarā** ( sna tshogs pa i mchod pa i sprin gyi dra bas khyab pa  
dañ ) r p dip j meghasam hapras r h.

dños rnam sgyu ma la sogs so sor ni/  
yañ dag rig ciñ jig rten blta<sup>(14)</sup> mkhas pa/  
rtog pa ma lus kun las ñes grol źiñ/  
mchog tu bde ba bskyed pa i rgyur gyur pa//99//

t bhir m yopam<sup>(15)</sup> dir peṇa **vastūnām** ( dños rnam ) **yā pratisamvit** ( so  
sor ni yañ dag rig ciñ ) / y ca **lokadr̥ṣṭis** ( jig rten blta ) tadvisay nurakt l  
lok nur panr̥tag t diparicayar p t<sup>(16)</sup> [ 28a4 ] tayoh/ **kuśalābhir**<sup>(17)</sup> ( mkhas  
pas ) **nirvikalpa** ( rtog pa...ñes grol źiñ ) **mahāsukhotpattihetubhūtābhiḥ**  
( mchog tu bde ba bskyed pa i rgyur gyur pa ) /

gzugs la sogs pa i lha mo rnam dañ ni/  
de bźin phyi yi dri sogs thams cad kyis/

Buddhajñ nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

rgyal ba i dbaṅ po rnam ni legs mchod ciñ/  
de ltar tha dad rtogs las<sup>(18)</sup> ñes grol bya//100//

Oṃ sarvatath gatap ja( sic )vajrasvabh va tmako haṃ/

tad evaṃbh t **rūpavajrādidevībhis** ( gzugs la sogs pai lha mo  
rnam ) **tadvad** ( de bzin ) **bāhyaś**<sup>(19)</sup> ( phyi yi ) ca **sa r vagandhā-**  
**dyai** r ( dri sogs thams cad kyis ) **jinendrān**<sup>(20)</sup> ( rgyal ba i dbaṅ po  
rnam ni ) maṇḍalacakra ntargat n/ Oṃ sarvatathāga [ 28a5 ] ta p j  
vajrasvabh v tmako ham/ ity **evaṃ**( de ltar ) p j dhiṣṭh namantreṇa  
p jyap jakap j **bhedavikalpanirmukta** ( tha dad rtogs las ñes grol ) yog  
**sampūjayed**( legs mchod ciñ ) iti//

sgra yi yul rnam ma lus pa rnam ni/  
brag cai sgra drar ñes brtags de<sup>(21)</sup> rjes la/  
rañ<sup>(22)</sup> yid lhag pai lha ru gnas pa la/  
chos rnam bstod pai sgra ni byed par bsam//101//

//id n ṃ stotropah ram ha/ pratiśabdety<sup>(23)</sup> di/ **ta**[ 28a6 ] **danv** ( der  
rjes la ) iti p j vidher<sup>(24)</sup> anantaraṃ **pratiśabdavat**( brag cai sgra drar )  
samastastutir paśabdagr man<sup>(25)</sup> **nirūpayan** ( ñes brtag ) / **svamanasy**  
( rañ yid ) **evādhidevatām**<sup>(26)</sup> ( lhag pai lha ru ) pradh nadevat ṃ / tasya  
**stutyā**( stod pai ) sukha san **dharmān**( chos rnam ) pratibh s r [ 28b1 ]

akṣobhyavajra mah jñ na vajradh tu mah budha/  
trimaṇḍala trivajr gra ghoṣa vajra namo stu te//102//

[ 28b1 ] pa...a **kṣobhyaḥ**/ sa ev bhedyatv d vajraḥ/ suviśuddha<sup>(27)</sup>[ ... ]  
**mahājñānaḥ**/ abhedyah[ ... ] 28b2 [ .. ]dhatv d **vajradhātumahābudhaḥ**<sup>(28)</sup>  
/ k yav kcittamaṇḍal tmakatv t **trimaṇḍalaḥ**/ k y divajreṣu cittasya  
pradh natv t **trivajrāgraḥ**/ evaṃ bh tam akṣobhyañ ca pratipadaṃ saṃbodhya  
**namo stu te**[ 28b3 ]ti namas tubhya ṃ stutimukhebhyo<sup>(29)</sup> dharm [ n ] huḥ/  
**ghoṣety** pradeśaya/ **vajrety** advaitadharmat m ity arthaḥ/

vairocana mah śuddha vajraś nta mah rata/  
prakṛtiprabh svar n m agra deśa vajra namo stu te//103//

evam virocan d **vairocanaḥ**/ niḥkleśasatv n **mahāśuddha**<sup>(30)</sup>abhedyas ntika<sup>(31)</sup>  
ka[ 28b4 ]rmm dhipaty d **vajraśāntaḥ**<sup>(32)</sup>/ param nand tmakatv n **mahārata**/  
darśajñ n tmakatv t **prakṛtiprabhāsvarāṇām agra**/ evam saṃbodhya **deśa**  
**vajra namo stu ta** iti p rvavad hu ḥ /

ratnar ja sug mbh rya khavajr k śanirmala/  
svabh vaśuddha nirlepa k yavajra namo stu te//104//

**ratnarāje** [ 28b5 ] ti ratnasambhavaḥ/ suṣṭhug mbh ryatv t  
**sugāmbhīrya**/ k śa<sup>(33)</sup>vadabhedyavajratv t **khavajraḥ**/ samat jñ natv d  
**ākāśa**<sup>(34)</sup>nirmmalaḥ san/ ca **svabhāvaśuddha**<sup>(35)</sup>kleśakarmajanmakṣayakaman  
[ 28b6 ] na [ ... ]**nirlepaḥ**/ tr[ ... ]**kāyavajra namo ' stu ta** iti p rvavad hu  
ḥ /

vajr mṛta mah r ja nirvikalpa khavajradhṛk/  
r gap ramit pr pta bh ṣa vajra namo stu te//105//

vajr mr̥ṭety di [ ... ]

- 1 D.C. : yis
- 2 Ms. : pravesya
- 3 Ms. : kamalaudare
- 4 P.N. : re las byuñ ba yi
- 5 Ms. : ° rasmi°
- 6 Ms. : ° k satalaṃ
- 7 Ms. : iti utsarg di
- 8 Ms. : rasmi
- 9 Ms. : alaṅkr̥ṭ bh̄iṅg t
- 10 Ms. : tath dyais
- 11 Ms. : sobham n
- 12 Ms. : salilakara
- 13 Ms. : bh v s
- 14 P.N. : lta
- 15 Ms. : t bh̄iḥ m yaupama°
- 16 Ms. : paricayar p ta
- 17 Ms. : kusal bhi
- 18 P.N. : rtog la
- 19 Ms. : bahyais
- 20 Ms. : jinendr na
- 21 P.N. : brtag der
- 22 P.N. : yañ
- 23 Ms. : pratisabdety
- 24 Ms. : p j vidhir
- 25 Ms. : sabdagrāma
- 26 Ms. : adhidevatam̐
- 27 Ms. : suvisuddha
- 28 Ms. : mah buddha
- 29 Ms. : stutimukhebhya
- 30 Ms. : mah suddha

- 31 Ms. : s ntika
- 32 Ms. : s ntaḥ
- 33 Ms. : k sa°
- 34 Ms. : k sa°
- 35 Ms. : °suddha°

#### ( 4 ) 和訳

蓮華の中に，これら自らの種字によって一切の色等を鉤召して，  
三菩提の意の自相をもつ光明の円光として観想すべし。(第95偈)

《蓮華の中》kamalodaraではじまり供養(の真言)で終わる6首のアー  
ルヤーによって，このように(=これ以前の部分で)灌頂を受けた(諸尊  
の)輪cakraを供養すべき方軌が説かれた。智薩埵の心真言・種字・光明に  
より，《一切の色等を鉤召して》sarvar p dy m kṛṣya，つまり自らの身  
体に入れ，金剛道(=尿道)より出して，《菩提心(=精液)の自相をもつ》  
bodhicittasvar paṃ《光明の円光》may khamaṇḍalaとして 妃の《蓮華(=  
女性器)の中に》《観想すべし》dhy y t。(第95偈釈)

妃の身体の毛孔のそれぞれから生じた，虚空一面を余すところなく覆う種々  
の光線の拡大しつつある集合体。智慧ある者は，それを放出せよ。(第96偈)

それからatasというのは，このように観想してから，《妃の身体の毛孔  
のそれぞれから生じた》prajñ pratiromodbhavaṃ，《種々の光線の拡大  
しつつある集合体》n n vidharaśmivistaravy haṃが，《虚空一面を覆う》  
vy ptasarv k śatalaṃ。《智慧ある者》matim nとは，放出等(すなわち放  
出者と放出対象)が別に存在するという観念bhedabuddhiを離れて，《余す

Buddhajñ nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第  
ところなく》abhtasとは、全身全霊をもってsarvatobh vena《放出せよ》  
protsrjet（という意味である）。（第96偈釈）

光明の門より生まれた身体を一切の装身具で美しく飾った無垢なる（女神た  
ちは）鏡，琵琶，香（器），食物を盛った器，布とダルモーダヤ等の（第97偈）

それから，《光明の門（=先端）から生まれた》raśmimukhanirgat bhir<sup>(1)</sup>《身  
体を一切の装身具で美しく飾った無垢なる》amalarv bharaṇasvalaṅkṛt ṅg  
女神たち，すなわち色（金剛女）等の女神が，（主尊の毛孔から放たれると観想  
すべきである。）（第97偈釈）

シンボルによって順次に，（彼女たちの）魅力的な手指は輝く。その光輝か  
ら化現した，種々の供養雲の広大な網が広がる。（第98偈）

（彼女たちが）《順次に》krameṇaというのは、次第の如くyath kramaṃ，  
鏡等の6種の《シンボル》cihnaisと，副次的なtad dya（持物）すな  
わち剣・蓮華等によって適宜yath yogaṃ，彼女たちの《魅力的な手  
指》sal lakarapallavaは《輝く》vilasanti，すなわち美しく飾られている  
śobham n。《光輝》bh vabh s，すなわち（女神たちの）輝ける魅力的な手  
から《化現した》nirmit 《種々の供養雲の広大な網》n n p j mbhuj lavisar  
とは、色等の供養の拡大しつつある雲の如き集塊（のことである）。（第98偈釈）

諸々の事物を幻等と知る無礙慧と，世間的な見方に善巧なることにより，一  
切の分別を余すところなく離れた，大楽の生起の因となる。（第99偈）

《諸々の事物を》vast n m 如幻等（の十喩）の姿と知る《無礙慧》

pratisaṃvitと、《世間的な見方》lokalokadr̥ṣṭi、すなわち対境への愛着により世間に随順する歌舞等の修習、これら両者に《善巧なることにより》kuśal bhir、《分別を離れた》nirvikalpa《大楽の生起の因となる》mah sukhotpattihetubh taことにより（第99偈の釈）

色（金剛女）等の女神たちと、そのような外界の香等（＝感覚対象）すべてにより、このように勝者の王（＝仏陀）たちを供養し、区別する分別を離れるべし。（第100偈）

上述の《色金剛女等の女神たち》r pavajr didev bhisの《ような》tadvad《外界の》b hyais《香等すべてによって》sarvagandh dyais 曼荼羅輪に住する《勝者の王たちを》jinendr n、Om sarvatath gatap j vajrasvabh v tmako hamという《このように》evam、すなわち供養加持真言p j dhiṣṭh namantraによって、供養処・供養者・供養を《区別する分別を離れた》bhedavikalpanirmukta 瑜伽者は、《供養すべし》saṃp jayet。（第100偈釈）

木霊の如く一切の声境を感知しつつ、その後で、自心に本尊を住せしめて、諸法が讃頌の音となると思念せよ。（第101偈）

いま《木霊》pratiśabdaではじまる偈（第101偈）によって、讃の奉獻が説かれた。《その後》tadanuとは、供養儀軌の直後に、（行者は）一切の音声の集積samastastutir paśabdagr maṃを、《木霊の如き》（実体のない）讃頌として《感知しつつ》nir payan、《自心に》svamanasi《本尊》adhidevatすなわち（曼荼羅の）主尊pradh nadevat を観想すべきである。この《讃頌》によってstuty 喜ばせつつ《諸法を》dharm n影像の如きpratibh sar pa（以下判読不能）（第101偈釈）

Buddhajñi nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

阿闍金剛よ。廣大智よ。金剛界よ。大慧者よ。三曼荼羅よ。三金剛の主よ。  
金剛よ。宣説せよ。汝に敬礼あれかし。(第102偈)

(判読不能)阿闍であり、また不壊でもあるから金剛である。彼は清浄(以下判読不能)であるから、《廣大智》mah jñ naである。彼は(判読不能)であるから、《金剛界大慧者》vajradh tu-mah budhaである。彼は身口意曼荼羅の自性をもつから、《三曼荼羅》trimaṇḍalaである。(身口意の)三金剛の中では、意金剛が最も重要だから、《三金剛の主》trivajr graである。

このような阿闍を、(偈の)各句ごとにpratipadam稱賛してから、《汝に敬礼あれかし》namo stu teとは「汝に敬礼する」namas tubhyamの意である。讃偈によって法が説かれた。《音声》ghoṣaは「宣説せよ(命令形)」(の意)である。《金剛》vajraとは不二の法性advaitadharmat の意である。(第102偈釈)

毘盧遮那よ。大清浄よ。金剛寂よ。大楽よ。

浄光明中の最勝者よ。金剛よ。説示し給え。汝に敬礼あれかし。(第103偈)

このように輝いているから《毘盧遮那》vairocanaである。無煩惱の衆生であるから、《大清浄》mah śuddhaである。彼は不壊の息災法の事業śantikakarmaの主であるから、《金剛寂》vajraśntaである。彼は最勝歡喜param nandaの本性をもつから、《大楽》mah rataである。彼は大円鏡智の自性をもつから、《浄光明中の最勝者》prakṛtiprabh svar ṇ m agraである。このように説いて、《金剛よ。説示し給え。汝に敬礼あれかし》deśa vajra namo stu te 以下は、前と同様である。(第103偈釈)

宝王よ。甚深妙よ。虚空金剛、如虚空界離諸垢よ。

自性清浄よ。無染よ。身金剛よ。汝に敬礼あれかし。(第104偈)

《宝王》ratnar jaとは宝生(如来)のことである。彼は著しく深いから、《甚深妙》sug mbh ryaである。虚空の如く金剛不壊であるから、《虚空金剛》khavajraである。彼は平等性智を有するから《如虚空界離諸垢》k śanirmalaであり、また自性清浄で煩惱と業による再生を断じているから(判読不能)、《無染》nirlepaである。(判読不能)《身金剛よ。汝に敬礼あれかし》k yavajra namo stu te 以下は、前と同様である。(第104偈釈)

金剛甘露よ。大王よ。離戲論よ。虚空持金剛よ。

貪欲の彼岸に到達した者よ。金剛よ。説示し給え。汝に敬礼あれかし。(第105偈)

《金剛甘露》vajr mr̥ta以下は、(以下欠)(第105偈釈)

- 1 これ以後、第100偈までの主題となる六金剛女と、それと同格の名詞・形容詞は、すべて複数・具格をとり、最終的に第100偈のsam̐ jayetにつながるが、訳文が晦渋となるため、これらの格関係は無視して和訳した。

## 付記

本稿の内容は、1993年にSpalding財団客員研究員として英国オックスフォード大学に留学した時、Alexis Sanderson教授の指導を受けて行った研究に基づいている。本論文について一切の責任が筆者にあることはいうまでもないが、教授の懇切な指導について、深く感謝の意を表す。

Buddhajñ nap da の *Samantabhadra nāma sādhana* における曼荼羅の供養次第

『普賢成就法』 *Samantabhadra nāma sādhana* の構成

三種三摩地	写本	論文	四支	偈番号	内容
	欠			第1～17偈	序と前行
初加行 三摩地		前田専学博士 還暦記念論集	下品	第18～54偈 第55～65偈	自己の浄化
	中品		第66～69偈	妃の浄化	
最勝 曼荼羅王 三摩地	残存	『密教図像』16	上品	第70～94偈	曼荼羅の出生
		本論文で 取り上げる部分		第95～100偈	供養
	欠				第101～105偈 第106偈
				第107～108偈	五甘露の奉献
最勝羯磨王 三摩地				第109～165偈	